



営農NEWS



新害虫ツマジロクサヨトウの発生が県内で初めて確認されました

病虫害発生予察特殊報第 2 号（県病虫害防除所 8 月 20 日発表）によると

令和元年 8 月に、水戸市の飼料用トウモロコシ圃場で本県では未発生のツマジロクサヨトウ幼虫が確認されました。ツマジロクサヨトウは、国内では本年 7 月に鹿児島県の飼料用トウモロコシで初確認され、その後、福岡県を除く九州の各県、沖縄県、高知県で発生が確認されています。本虫は、南北アメリカが原産で、平成 28 年頃からアフリカやアジアで急速に蔓延し、本年には中国や韓国、台湾でも発生が確認されています。

日本国内ではこれまで、農薬散布を通常は行わない飼料用トウモロコシを中心に、さらにスイートコーン（未成熟トウモロコシ）等で発生が確認されていますが、諸外国ではアブラナ科（カブ等）、イネ科（イネ等）、ウリ科（キュウリ等）、キク科（キク等）、ナス科（トマト、ナス等）、ナデシコ科（カーネーション）、ヒルガオ科（サツマイモ等）、マメ科（ダイズ等）での寄生が確認され、多食性であるとされています。

＜ツマジロクサヨトウの生態＞

成虫は開帳約 37mm、雌雄で外観が大きく異なり、雄のみ前翅中央部に白斑があります。終齢幼虫は体長約 40mm で、頭部の逆 Y 字および尾部の斑点が特徴です。卵は寄主植物に塊状に産み付けられ、雌の体毛で覆われます。

本虫は、暖地に適応した種（南北アメリカ大陸の熱帯～亜熱帯産）であり、熱帯では年 4～6 世代発生するとされ、南北アメリカでは毎年夏季に成虫が移動、分散しますが、暖地を除く地域では越冬することができないとされています。

＜防除対策＞

本県では、当面、植物防疫法第 29 条第 1 項に基づく措置を行うとし、国と協議により選定した農薬（下記の表）を使用して早期防除や早期刈取りによるサイレージを指導しています。なお、農林水産省によると、本虫は、これまで国内で発生しているヨトウムシ類と同様、的確な防除の実施により被害の軽減が可能であると考えられています。

- 1) 多発生すると被害の拡大する恐れがあることから、圃場をよく見回りして幼虫の早期発見に努める。
- 2) 発生圃場においては、別に指定された薬剤の散布を行うか、薬剤散布が困難な場合には早期刈取りによるサイレージを実施する。
- 3) 農薬の使用にあたっては、散布は無風または風の弱い時に行うなど、近隣に影響が少ない天候や時間帯を選び、風向きや防除器具のノズルの向き等にも十分注意するとともに、隣接農作物の栽培者に対して散布予定農薬の種類や散布時期等を事前に連絡するなど、農薬の飛散（ドリフト）に十分注意する。
- 4) 幼虫の分散を防ぐため、作物の収穫後は直ちに耕耘する。

表 1 植物防疫法第 29 条第 1 項に基づく措置で使用できる主な農薬

（令和元年 8 月 27 日現在）

対象作物名	使用できる農薬名
飼料用トウモロコシ	BT 剤（トアロー水和剤 CT、エスマルク DF、フローバック DF、エコマスター BT） パダン SG 水溶剤、モスピラン顆粒水溶剤、スミチオン乳剤
未成熟トウモロコシ	スミチオン乳剤、トレボン乳剤、アフーム乳剤、プレバソフフロアブル 5、コテツフロアブル、プリンスフロアブル、アグロスリン乳剤、プレオフロアブル、カスケード乳剤、フェニックス顆粒水和剤など BT 剤（トアロー水和剤 CT、エスマルク DF、フローバック DF、エコマスター BT）など
水稻 ※	スミチオン乳剤、トレボン乳剤、ディアナ SC など
稲（箱育苗）	フェルテラ箱粒剤、ゼロカウント粒剤、プリンス粒剤
サツマイモ	オリオン水和剤 40、トレボン乳剤、アフーム乳剤、アグロスリン水和剤、フェニックス顆粒水和剤、アクルフフロアブル、マッチ乳剤、アニキ乳剤、トルネードエース DF、コテツフロアブル、プレオフロアブル、BT 剤（ゼンターリ顆粒水和剤、フローバック DF、エコマスター BT）など
ソルガム（飼料用）	モスピラン顆粒水溶剤、オルトラン水和剤

注) 1. 各農薬の使用については、県病虫害防除所または農林水産省のホームページを参照してください。

2. ※飼料用米への農薬使用については、「飼料として使用する粳米への農薬の使用について」及び「稲発酵粗飼料生産・給与技術マニュアル」を遵守してください。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※ JA 全農いばらきホームページでもご覧になれます。



JA 全農いばらき

生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040